



上左:軍服の入っていた箱  
上右:軍服  
下左:左袖の布  
下中:右胸のバッジ  
下右:前回紹介した  
お菓子の型





左: 徴兵(抽せん)の札  
右: 出征・除隊の  
挨拶のはがき

拜啓 残暑酷折柄御尊台益々御清程之段奉賀候  
陳者今や日支兩國干戈を交ふるの秋に該り正義皇軍の一  
員となりしは大和男兒の本懐とする處に有之候出發の節  
は御多用中殊に炎暑の御御見送りを忝ふし又特別の御厚  
志に預り御厚情の程奉深謝候本日無事入隊仕候間御安心  
被下度今後は盡忠報國の誠を致し一意専心軍務に精勵し  
貴意に添ふ考に御座候一々拜趨御禮申上べきが本意の處  
共意を得ず不取敢以寸楮御禮申上度如斯に御座候  
勿々拜具

昭和十二年八月二十一日  
豊橋歩兵第十八聯隊

謹啓  
時下秋冷の岡御尊家御繁盛賀奉候  
今回入營出發に際し御多忙中遠路遙々御見送り下され奉難有く深謝候  
就而本日亦記中隊所屬として軍務に限する事と相成候此の上は只管軍  
人精神の發揚の爲尙國家の干城として軍務に精勵し御厚情の萬一に報  
ひたき覺悟に御座候乍他事御休心被下度先は御禮旁々無事入營通知迄  
尙入營留守中は何分宜敷く御禮申上候  
末筆ながら御一同權益々御多祥の程切に祈り候  
敬具

昭和九年九月廿七日  
名古屋輜重兵第三大隊第一中隊

謹啓 益々御多祥奉賀候  
陳者不肖今回出發に際しては御鄭重なる御厚志を忝ふ  
し且御多用中御見送り被下重々の御厚情奉深謝候  
今後は一意専心君國の爲奮闘可致候條何卒御安心被下  
度候  
先は右不取敢御禮申上度如斯に御座候  
敬具

昭和十六年七月十五日

拜啓 朝夕冷氣相催し初秋の訪れを覺ゆるの時愈々御清程奉賀候  
陳者 支那事變により一昨夏應召征途に就き中支各地に轉戦し光輝ある我  
が聖業達成の爲懸命に微力を捧げ居候處不圖も今回歸還を被命從軍  
滿二ヶ年余にして去る十日無事除隊歸郷仕候在陣中は毎々屢々慰問  
激勵を賜はり且つ家族に迄全様御支援を以て後顧の憂患を斷つ御  
措置被下たる御厚情に對し感謝の念を新にするものに有之候今後は  
専ら銃後に在りて在陣の心意氣を休し映畫報國の道に邁進致度念願  
先は右不取敢以寸楮御禮の御挨拶申上度如斯に御座候  
敬具

昭和十四年九月十日  
同崎市傳馬町

上左: 帝国在郷軍人会歌

下左: 囑託の書類

上右: 封筒

下右: 委員配置表

帝 国 在 郷 軍 人 會 歌

(一) 建國二千有餘年、神聖無比なき皇國の、世界に負へる大使命、果すは誰の任務ぞや

(二) 朝日輝く旗、迷途の利劍、正義の利劍、救ひ匡すはいつの日ぞ

(三) 郷に入りては忠良の、民とし配み事あらば、出でし皇國に捧ぐべき

(四) つごむる業は異なれど、思ひは一ついつとても、皇國を護る赤誠は、吾等が胸に燃ゆるなり

(五) あゝいくそたび天皇の、降したまへる勅語の、聖旨かしこみ東の國も、心ゆるめず鍛へばや

(六) 忠勇義烈の血を捧げし、日本男子の輝ける、譽たふごみいざやいざ、雄々しく共に進まばや



係名	氏名	任	承力
總務		全般ノ監督指導	
庶務		庶務合計ニ関シ書類整理及配列	
來賓		應接室ノ案内湯茶ノ接待	
受付		ノ合款ノ整理 2.出席ノ自表作成 3.軍隊手帳補充中央手帳ニ記入 一般ノ指導等ニ当ル	
指導		一.小隊 編成後各担任小隊ノ 二.各小隊 各小隊教練 三.分隊 分隊教練 四.分隊 分隊教練 五.分隊 分隊教練 六.分隊 分隊教練 尚、 通宜分隊長ヲ選任シ教練助手トキリ補助ニ當ラシム	
器材		防具(四〇担) 手榴彈(四〇) 假標 竹槍(三) 1.準備ノ及整理 防具ハ延上ニ配列スル 吹鼓台(各器) 準備整理	
炊事		湯茶ノ準備 飯汁ノ準備(材料購入ヲモ含ム) 及後片付	
備考		一.差係員ハ會午七時三十分マデニ學校(集合)トト 二.各班長ハ出欠簿ヲ持参スルコト 三.各指導員ハ研究ヲ十分ニ指導(遺憾ナキヲ期セヨ)	

帝 国 在 郷 軍 人 會 岡 崎 市 梅 園 分 會

昭 和 十 五 年 一 月 三 十 日

囑 託 ス

市 馬 下 中 長

帝 国 在 郷 軍 人 會 岡 崎 市 梅 園 分 會